

SNW 市民とのエネルギー・原子力お話し会 2019 詳細報告

令和元年 7 月 28 日

(世話役) 金氏 顯

1. 日時：令和元年 7 月 27 日(土) 14:00～17:30
2. 場所：小倉飯店 2 階 西湖の間,
3. 参加市民：28 名（うち女性 9 名、昨年参加者 7 名、前日まで 30 名だったが当日 2 名急用で欠席）
4. 参加シニア（10 名）：今村博信、大野 崇、金氏 顯、川合将義、梶村順二、
工藤和彦、中崎信一、野村真一、早野睦彦、若杉和彦、
5. プログラム（全体進行&司会：中崎信一）
14:00～14:10 はじめに当たって、シニアの紹介(金氏 顯・SNW 九州副会長)
14:10～15:10 講演;工藤和彦
15:10～17:00 5グループに分かれて話し合い
17:00～17:25 全体で話し合い(各グループ報告(シニア)と自由なお話し合い)
17:25～17:30 終わりに当たって(早野睦彦・SNW 代表幹事)、アンケート記入
17:45～19:30 希望者による夕食懇親会〔飲み放題付き 5000 円、19 名参加〕
6. はじめに当たって、シニアの紹介(金氏 顯・SNW 九州副会長)
 - ・今日は週末の貴重な時間に、またお暑いところ、ご参加いただき、誠に有難うございます。
 - ・エネルギーは私達の生活や産業に欠かせないものですが、先日の参議院選挙でも争点になりませんでした。中でも原子力については難しくよく分からないとか、日頃から疑問や問題に思っていることなどあるのではないかと思います。今日はこれから 3 時間半、講演とグループに分かれてのお話し会を行いますので、日頃の疑問やご意見を自由にお話ししていただきたく、よろしくお願いいたします。
 - ・今日の対話会の概要を SNW の HP に掲載しますが、市民の皆様のお名前は一切載せません。タブーはありませんので、自由にご発言いただきたいと思います。
 - ・原子力学会のシニアネットワーク連絡会は会員約300人で、主たる活動は学生との対話、この付近では九工大、北九州高専、また九大などで毎年開催しています。市民との対話は昨年ここに北九州で開催したのが初めてです。
 - ・今日参加していますエネルギー、原子力の専門家 10 人の現職、元職、専門分野を簡単にご紹介します(詳細省略)。
7. 講演（1 時間）
テーマ：「我が国と世界のエネルギー及び原子力の現況について」
講師：工藤和彦(九州大学名誉教授)
(概要)世界のエネルギー利用の現状、日本のエネルギー政策(第 5 次エネルギー基本計画)と課題、原子力発電について(放射線と放射能、東電福島事故と対策)。全 78 ページ。

（講師反省）講演時間を1時間いただいた。上記内容をすべて資料には入れたが、時間内で説明は十分できなかった。福島第一原子力発電所事故と放射線・放射能については相当端折って話した。事前アンケートの結果を参考にして、今後の講演時の資料作成をしたい。

8. 5グループに分かれて話し合い(約2時間)

A～Eの5つのグループに分かれて、対話テーマは特に決めず、各班のファシリテータ（Bのみ市民に、他のグループはシニア）が自由に話を進めた。

以下に各グループのお話し会の概要を報告する。

<A グループ>

参加者：市民6名、シニア：○金氏、*若杉

対話概要：

ファシリテータ（金氏）の司会の下、各自が自己紹介し、聞きたいテーマをポストイットに書き対話を始めた。参加者は多士済々で、TV報道や地方自治体で責任ある立場で活躍した者、普通の会社員や伊方原発近くに住んだ市民等から構成され、次のような話題を中心に活発な対話となった。

市民から出された質問に対する対話では、高レベル放射性廃棄物地層処分の総論賛成各論反対(NIMBY)に対処するにはどうしたらよいか？、原発事故で甚大な被害を出した原子力はリスクゼロであるべき！という意見にどう向き合ったらよいか？、マスコミの原子力報道の明らかな間違いとそれに対処するにはどうしたらよいか？などがあった。また、シニアからは、我が国のエネルギー問題、原子力問題は大変重要なものになぜ国民的な議論にならず、選挙の争点にもならないのか？の質問を出して参加者の意見を聞いた。

それぞれの話題に対して完璧な回答はないものの、シニアから核エネルギーと化学エネルギーの違いによる原子力の有用性、再生可能エネルギー利用の限界、福島事故の放射能による犠牲者ゼロの実績から原発事故を見直すべき等を説明し、意見交換した。このように、シニアはこれまでの学生との対話では得られない、市民の実社会経験に基づく疑問や貴重な意見を聞くことが出来、実り多いものであった。

<B グループ>

参加者：市民6名（男性4名、女性2名）、シニア：工藤、*川合

対話の概要

自己紹介後、井上政典氏をファシリテータとして対話が進められた。井上氏自身が、原子力エネルギーについての理解が高く、日本のエネルギー問題の各項目を次々と取り上げて時には彼の持論とともに質問を寄せられて多くを議論できた。以下、主要な発言を記す。

(1) 放射線について

事前に渡された興味ある項目に含まれていなかったが、即座に「ここに1 Svの放射線源がある。さて、どうしたら良いか？」という質問が出された。

続いて、低線量被ばく影響におけるホルミシス効果、福島県での甲状腺がん検査の問題が挙

がり議論。がんは、活性酸素によるもので、生活上のストレスの影響の方が自然放射線の被ばくよりも高いこと、特に喫煙や偏食の大きいことが述べられた。放射線に対しては正しく恐れ、対応することの大切さが認識された。工藤氏が持参してきた放射線測定器(GM 管)使って、自然放射線の存在を実感した

(2) 原子力反対派との対話

放射線や原子力エネルギーについて、反対派との議論は一方的な言い合いで噛み合わない。ゼロリスク願望への対応に対しては、自動車の運転を例に挙げてリスクとは、身の回りにいっぱいあることを伝えたらどうかとの意見が出された。

(3) 原子力発電所の再稼働問題

去年 9 月 6 日の北海道電力のブラックアウトは、泊原発の再稼働を規制庁が許可しないことと再生可能エネルギーの脆弱さによることを示した。

一方、2011 年 3 月の東日本大震災の折に、千葉県の海岸地帯に林立する火力発電所も津波の影響を受けた。それでも新潟柏崎刈羽原発があったためにブラックアウトを免れた。原発は、稼働することのリスクだけでなく、それが無いことのリスクも主張することが大切である。

(4) 高レベル廃棄物問題

高レベル廃棄物保管施設の必要性は、認識されつつあるが、地域を具体的に挙げないで地図で説明する NUMO のやり方は、下手と言える。適正立地の市町村名を複数箇所挙げることで議論させることである。

(5) 原子力エネルギーの選択

新エネルギーの可能性はないか？ 核融合エネルギーは現在フランスで ITER 開発が進んでいるが、未だ時間がかかりそうだ。水素利用もあるが 2 次エネルギーである。今の産業を維持するには、原子力を継続することが必要。

((6) マスコミ

”小泉の嘘つき”は名言だ。原発の安全性についてのアンケート結果(思う 30%): 問い方で変わる。原発容認:産経と読売、反原発:朝日、毎日、西日本新聞、共同通信、中間:日経

(7) 川内原発再稼働への三反園鹿児島県知事の裁定

三反園知事は、決めかねていたが、九州人の原発への反対が少ないことで、再稼働容認。これは経済を考えてのものだが、民意だけに頼ることで安定性を欠き、何らかの検討の仕組みが必要と思われる。

(8) 日本人の科学リテラシー

日本人は情緒的であり、物事を理詰めで考えるより、感覚で判断することが多い。すなわち、科学的リテラシーに欠け、マスコミの主張を受け入れ易い。

女性の理科嫌いは少なく無い。料理こそ理科という主張に続き、調理科学会の設立とその活動の説明があった。

(9) 日本のエネルギー政策

安倍政権に変わっても、原子力政策が目立って改善されず、再稼働が遅れている。第 5 次エネルギー政策でも新增設の記述がない。

再生可能エネルギーは、不安定であり、バックアップ電源が必要。

大学では廃炉ビジネスの方が人気があるが、新型炉開発に対する熱意は薄らいでおり、この

ような状況では、中国やロシアの後塵を拝しかねない。

大学における原子力関連学科への応募者は、懸念しているほどには減っていない。

(10) 一般人との対話

対話を通じて、いろんな人の意見を聞くことが重要。

一般人の印象 ロボット：鉄腕アトムで親しみを持たれている。

原子炉：ゴジラや広島長崎の原爆で怖がられている。

以上、非常に多くの意見が出ましたが、概ね受け止められたものと思われます。

<Cグループ>

メンバー：市民 6 名（男性 4 名、女性 1 名）、シニア ○大野、* 梶村

意見交換 （Sはシニアの発言）

ファシリテータの大野崇氏よりメンバーの自己紹介のあと質問・意見等を引き出し、必要に応じてシニアが答える形で進めていった。主な内容は以下の通り。

○日本のエネルギーはこれからどうなっていくのか

- ・これまでのエネルギーの主流は石炭→石油→原子力→再生エネへと動いている。南海トラフの危険性や廃棄物処分場の未決定は、原子力への逆風材料となっている。エネルギーの主流はその時の技術や社会状況によって選ばれていく。
- ・二酸化炭素の発生が多い石炭発電への融資を控える動きがある、石炭火力も無くせない。発電効率の向上や二酸化炭素回収等、技術開発への投資が必要。
- ・元々、技術は未完成の状態で使っている。全てのものにメリット・デメリットがある。リスクとコストベネフィットを国民は理解する必要がある。
- ・20 年で寿命を迎える太陽光パネルの大量廃棄処分が心配である。
- ・2030 年の原子力の発電量目標値 22%は可能なのか。

S 目標達成には約 30 機の稼働が必要であり、現在9機が稼働。新規制基準の審査に時間を要しており現状厳しい。再生エネルギーについても、蓄電池等、大幅な技術革新への期待が大きい現実厳しい状況。

・エネルギー別の発電コストはどうなっているのか。

S 2030 年モデルプラント試算結果、原子力が一番安い電源となっている。

安全対策費に 2000 億円掛けても採算が合うことで再稼働を目指している。

○原子力を危険と感じるのはどういった点か。どうすれば原子力理解が進むか。

- ・福島事故が発生するまでは、受け入れられていた。
- ・住民への原子力賠償が十分でない。避難家族あたり1億円は補償すべき。
- ・マスコミは危険な事しか報道しない。規制側、原子力関係者はここまで安全対策を実施していることを国民にしっかり説明すべき。

○高レベル放射性廃棄物の処分はどこまで確立しているのか。

S 地層処分の技術は確立しており、NUMOが主体となって各地で説明会を行って社会的理解を進めている状況です。処分場受入れが課題で、政府も前面に立ち社会的コンセンサス醸成に取り組んでいます。

<D グループ>

参加者：市民 5 名（うち学生 1 名）、シニア 2 名（○早野、* 中崎）

対話概要：

ファシリテータ（早野）の司会の下、各自が自己紹介し、事前のアンケートから関心の高い項目を拾い上げることとしたが、関心は満遍なく広がっており、話題は多岐に渡った。質問に対しては基調講演が網羅的内容になっているのでこれに沿ってファシリテータ（専門家）から回答する形になった。主な質問は以下のようなものである。

- もんじゅは技術的にダメなのか？どうして高速炉というのか？
- 日本の Pu は約 47 トンもあるが、大丈夫なのか？⇒核燃料サイクルと Pu 問題の説明、再処理と直接処分の説明、および原爆可能性の説明
- 原爆を受けた広島・長崎は当時ぺんぺん草も生えないと言われていたのに、その後市民は元気に生活している。福島では被ばくによる死者はいない。どうしてメディアはそのことを報じないのか。
- しかし甲状腺がんが増えているとの報告がある。真相は如何に？
- 最新情報として「世界初となる商業規模の核融合炉が 2025 年に稼働を始める予定、日本を含む 35 カ国が協力」とあったが、核融合の可能性は如何に？⇒研究開発から産業化に至る道のりについての説明

紙面の都合上、逐一の回答は割愛するが、それぞれの質問と回答を通じて行き着くところはメディア問題であり、日本のメディアが結論ありきの姿勢で報じ、メディアとしての公平性を欠いている点は国益を大きく損することになるとの意見が多かった。

D グループには保守系の元代議士も加わり、保守的な意見が多く、反原発を主張する参加者が不在で議論の広がりが乏しかったかもしれない。

<E グループ>

市民 5 名（○野村、* 今村）

最初に自己紹介と、市民の方には日頃から疑問に思っていること、興味ある項目等を述べていただき、事前アンケートでいただいた興味ある事項と合わせて紹介して、テーマを設定して対話を始めていった。

市民の方々には日頃から意識の高い方もおられ、自分の意見をしっかり持たれており、意見交換を主として、いくつかの専門的な質問に答えながら進めていった。

以下に主なテーマと意見交換の概要を示す。

① 原子力の安全性、リスクについて

（市民の意見）

・原子力についてのみ、「ゼロリスク」を求めている。自動車事故で毎年数千人が亡くなっているが問題視されずに、福島事故の放射線による直接の死者は出ていないが、不安ばかりが言われている。火山も原子力発電所まで影響が及ぶなら途中の地域は心配しなくてよいのか。

・「賛成」か「反対」のみの議論で、リスクの議論がない。安全対策に「絶対」はない、「リスクを限りなく低くして」利用いくことが大切である。考えることは考えぬいて準備すべきであり、「想

定外」は許されない。

- ・広島、長崎を知っているので放射性物質は怖いという思いがある。

(原子力シニアの意見)

- ・放射線については、正しく怖がることが大切である。

- ・福島でも、原子炉を冷やすことが出来れば重大な事故に至ることはなかった、そのため冷やす設備、電源設備等を非常に強化した。

② エネルギー構成と再生可能エネルギーについて

(市民の意見)

- ・再生可能エネルギー(風力、太陽光、水力)を増やしていくべき、再生可能エネルギーと原子力を進めて、化石燃料の使用を減らすべき。ただし、LNG火力も進めていくべきである。

- ・再生可能エネルギーは、コストが高く、発電が天候等に左右される不自由さがある。

(原子力シニアの意見)

- ・自然エネルギーの利用には、上限があると思う。ドイツでは、再生可能エネルギー賦課金制度により、家庭用電気料金も上がっている。

- ・LNGも輸入に頼るため、供給セキュリティの点からの注意も必要である。

③ 原子力を含めたマスコミ情報の扱いについて

(市民の意見)

- ・福島事故時に避難の指示が誤っていた、事故時は適切な情報と指示が大切。

- ・基準値(1mSv、食品基準等)の考え方も、皆知らない。こういったことも広報をしないとけない。

- ・今まで原子力について知ろうとしていなかった、教育も大切である。

(原子力シニアの意見)

- ・マスコミや声の大きい人が正しいとは限らない。マスコミを含め、その情報が正しいかどうか判断することが、大切である。また、マスコミが誤った書き方をしないような広報の工夫も必要である。

④ 廃炉について

(市民の意見)

- ・これから廃炉しかないとなると、原子力に若い人は集まらない。技術者の育成、継承も大事であり、改良しながら使っていくことも大切ではないか。

(原子力シニアの意見)

- ・ドイツでは、福島事故を受けて2011年に「2022年末までに原子力全廃」法案を閣議決定した。当時17基運転していたが、現在7基は運転している。

9. 閉会挨拶(早野睦彦 SNW 代表幹事)

お忙しい中、「市民と専門家のエネルギー・原子力お話し会」に多数ご参加いただきありがとうございました。我々シニアネットワーク連絡会は学生さんたちとの対話会を中心に進めてきたので、今回のような社会の様々な分野で活躍されてきた経験豊かな皆様とお話しできるというのは私にとって貴重な経験でした。

専門家と非専門家の意識の乖離が相当大きいと認識したことがあります。関東大震災の時に

中学生だった父は震源地に近い小田原の生家で地面がパカパカ割れその亀裂がいたるところに走った恐怖がトラウマになっていました。そこで父は私にあのような大地震が発生したらどこに逃げるかと尋ね、当時、私はもんじゅの耐震設計を担当していたものですから、真っ先に原子炉の中央制御室に逃げると言ったらポカンとして理由も聞きませんでした。私にとっては原子炉の中央制御室がやられようものなら一般の建物はとくにやられているわけですからリスクは低いと直感で思ったわけですが、多分、父はそれ以前に原子炉を想像して思いもしない答えだったのでしょう。

また一方で環境の非専門家として思うことがあります。昨今の欧州で湧き上がっている環境原理主義とでも云うような過度な自然保護運動です。そもそも私は地球環境という言葉に否定的で、人類環境と云うべきではないかと思っています。地球 46 億年の歴史では赤道まで氷に覆われたアイスボールの時期もありましたし、オルドビスから白亜紀に至る 5 回の生物大量絶滅危機がありました。自然や環境を言う前に人類のことをまずは考えるべきであろうかと思います。

申し上げたいことは、環境や原子力によらずですが一方的なものの見方、教条主義的な発想は身を亡ぼすと思います。

私は大学で教えていました。そこである学生から「先生、原子力は結局必要悪ではありませんか？」と尋ねられました。

「原子力は必要悪」その通りです。これをさらに敷衍すれば「科学技術は必要悪」になります。科学技術に良い悪いはありません。これは使う側、人間側の問題です。科学技術は少なからず光と陰があります。原子力はこのコントラストがきついのです。ただし、これは原子力に限ったことではありません。AI や遺伝子工学など未来技術はすべからずそのようなもので、原子力を特別視してはいけないと思います。

工学は失敗学であり、経験学です。失敗を認めない社会には進歩はありません。また、文明は不可逆です。あったものをなかったことにはできません。

21 世紀を生きるにはそのような環境、即ち、これからますます巨大な科学技術を扱わざるを得ないことを自覚することだと思います。

人間の飽くなき好奇心が科学技術を発展させてきましたが多分この人類の営みが消えることはないでしょう。そして、人類は自ら作った科学技術によって、今までは幾度か壁を破って進んで来ましたが、どこまでこの不可逆な道が続くのか分かりません。人類は永遠ではないでしょう。成長の限界は必ずあると思います。

生きている限りリスクはあります。死んで初めて絶対安全が訪れます。原子力にはリスクがあります。原子力を失った場合にもリスクがあります。それを冷静に比較衡量する力量が 21 世紀に生きる人々に求められています。そしてそのリスクがどの程度のものであるかの認識を共有し、リスクミニマムを求めながらもリスクとともに生きてゆく覚悟を決めてこそ成熟した大人の社会というものでしょう。

今日のようなお話し会には答えがあるものではありません。みんなでいろいろ考えて行くことが我々に残されたものの道であろうと思います。今日のお話会がその一助になればと思います。本日はいろいろ刺激をいただき、ありがとうございました。

10. 参加シニアの感想

<今村博信(Eグループ)>

- ・原子力シニアネットワーク・北九州市民との対話会は昨年に続き2回目とのことでしたが、私は初めて参加させていただきました。以前、学生との対話には参加させていただいていましたが、今回の市民との対話は、全く異なった印象を受けた。
- ・まず、参加された市民の方は、社会経験が豊富で、原子力、エネルギー等に対してもかなりの知識を持っておられる方が多く、初めから自分の意見を積極的に堂々と述べられていた。かなりいろいろな分野にわたり意見が出ていたが、最初に各々の意見、疑問点、議論したい事項等を述べていただき、その中からファシリテータが、本日のテーマをいくつか選び議論、説明を行ったことが、話があまり発散することなく、ある程度の深さで議論を進めることができたと思う。
- ・また参加者の1人から「今までは、「原子力しかない」というような言い方の話しか聞いたことがなかった、今日はそうではなく再生可能エネルギー、原子力などを総合的に進めるという話であり、良かったと思う。」との発言もあり、資料の表現、話の仕方等にも細やかな配慮、工夫が必要と感じた。
- ・また参加者により知識のレベルが非常に異なるので、その配慮も大切であると感じた。また放射線検出器の実物を持ってきていただき、デモンストレーションを行われたことは、非常に印象に残った様子であり、放射線の話と合わせると効果的ではないかと思った。
- ・いずれにしても、このような市民との対話を今後も定期的に続けていき、正しい知識を対話を通じて伝えていくことが、非常に重要であると感じた。

<大野 崇 (Gグループ)>

北九州市民との対話会へ初めて参加した。最初に感じたことは、生きた対話が行われたことである。これまでは、これから社会へ飛び出そうとしている若者相手であったが、今回は、足が地についたしっとりした大人の対話を経験した。また、25名を超える市民の方々が一同に介したことに、金氏様、中崎様をはじめとする九州 SNW の実力を垣間見た。

Gグループに参加し、企業、銀行、太陽光パネル製造など5名の多彩なご経験を有する方々と幅広い意見交換を行った。これに、SNW九州の梶村様とファシリテータとして小生が加わった。エネルギー・原子力に対し思っていることを述べてもらい、対話に入った。日本のエネルギーがこれからどうなるのか、石炭火力はなくせないがCO2回収技術の見通しは、再生可能エネルギーの限界とイノベーションによる脱炭素社会への移行の可能性は、原子力の不安解消は避難民への1億円の賠償が握る、廃棄物処理問題の本質は、など、本音ベースの意見交換が行われ、あっという間に時間がすぎた。集まった方々は皆勉強家で知識レベルは高いが、こうして皆と話す機会は日頃ないのではないか。来年以降も、自分の考えを皆に聞いてもらい話し合う機会として本対話会の継続は重要である。九州 SNW のご努力に敬意を表します。

<梶村 順二(Cグループ)>

社会人で構成される北九州市民とのグループ対話会は初めての参加であるが、グループの対話テーマの設定がなく、少し不安な気持ちで対話会に臨んだ。これまでは、学生の質問に対する

回答に時間を費やす対話会であったが、社会・人生経験豊富で多彩な方々と、エネルギー・原子力に対する幅広い意見交換を行い、どちらかといえば、ご意見を聞く時間が長い聞き役に徹した対話会であった。

参加された方々は金氏さん・中崎さんの知人やそのお友達等、北九州のオピニオンリーダー28名の参加で開催できたことは、世話役の人脈と努力に敬意を表したい。

日本のエネルギーはどうなっていくのか、原子力理解を進める方策、放射性廃棄物の処分等、意見交換を行った。原子力に対する不安解消ができたというより、参加された有識者である皆様の考えや意見が、対話会に臨むこれからの自分への良い経験になったと思われる。次回の対話会に活かしていきたい。

<金氏 顯(Aグループ)>

昨年は市民の参加を募るのに、100人に呼びかけて10名参加と大変苦労したが、今年はその経験から、地元に住む知人の多い中崎様と手分けして、それぞれ知人の数人に声をかけてその人から更に知人や友人に広げていくようにして、約30人に、しかも地元オピニオンリーダーにも参加していただくことができた。最終的に参加シニアは28名、5グループとなり、昨年より6名増、1グループ増となった。昨年の経験者は7名なので大半が初めて参加、しかも女性が9名と昨年の3名から大幅増。大半が中高年齢層なので、世論調査で原発再稼動に否定的な年代となったのは、学生との対話とは異なる層なので大変意義があった。

保守的意見で物足りなかったというシニアの感想もありましたが、参加市民は仕事の関係やマスコミ情報などから原子力に対し何らかの問題意識を持って参加され、それをグループのお話の中で取り上げて、シニアや他の市民と意見交換する中で原子力に関する知識も深まり、大変良かったという感想を漏らしていました。そういう市民には今回のお話し会は非常に良い機会だったと思います。

しかし、年に1回の3時間くらいのお話し会では「原子力への理解」は無理で、もっと同じメンバーで色々なテーマ(例えば、高レベル廃棄物地層処分へのNIMBY意見にどう対処すべきか?、原子力はゼロリスクであるべき、再稼動は反対などの意見にどう答えるか?、などなど)を回数を増やしてお話し(自由な意見交換)をする必要があります。そういうことも考えてみようと思います。

また、この会の学生との対話会とは異なる大変重要な意味を多くのSNW会員に体験していただいたので、北九州では来年も続けて開催しますが、北九州市以外でもぜひ開催していただきたいと思います。我々も支援します。

<川合将義(Bグループ)>

これまで、学生相手の対話が多く、多くは学生からの質問に対して説明することが多かった。そのため、シニアの喋り過ぎとの批判を呼んだりしていた。そこで、回答しながら逆質問をしてなるべく学生が考えることもしたりしたが、対話と呼ぶには疑問符がついた。

今回は、ファシリテータを対話に慣れた井上氏にやって頂いたので、シニアは喋りすぎることなく、適宜、補足意見を述べることで済んだ。また、参加者は、町の行政にも携わったことがある人だけに、高レベル放射性廃棄物の処理施設の問題など、なるほどという意見を聞くこともできた。そして、意見に大きな差がないこともあって、現政権の原子力開発への消極的な姿勢への不満も述

ることができた。とにかく、対話した項目は、放射線から始まり、反対派への対応、原子炉の再稼働問題という直近の問題から今後の原子力エネルギー政策など、10項目に渡って議論ができたのも驚きである。

班活動の報告書には書かなかったが、井上氏の歴史観や日本人の価値観など、普段聞くことができない話も聞かれて、楽しい対話であった。贅沢かもしれないが、原発に批判的な人が混じっていたら、こうした集いに出る人は冷静な議論ができる人だろうから、より賑やかな議論ができるものと思われる。今後、その実現を期待したい。

<工藤和彦(Bグループ)>

参加者はすべて社会人としての仕事を経験している方々で、生活から得られた知識・経験をベースに、学生との対話会とはかなり異なった雰囲気での意見交換であり、各グループからの報告も幅広い内容であった。

原子力反対派の「ゼロリスク」の主張に効果的に反論すること、エネルギーミックスについて理解を得ること、廃棄物処分についての的確な説明をすること、マスメディア対応などが共通の話題であったようだが、今後とも SNW で研究すべきテーマである。

閉会時の早野氏の挨拶にあった、「環境保護運動」は、環境保護ではなく、「人類環境主義」ともいえるべき「環境原理主義」であり「極端な教条主義（原理主義）は身を亡ぼす」という言葉は、自分には目からウロコの見解に聞こえた。

<中崎信一(Dグループ)>

Dグループのシニアは私と早野様でした。それが幸いし、今まで理解できなかったプルサーマル計画の意味が早野さんが仕事人生の全てを高速炉にささげられた経験での説明により、やっと理解できました。

『もんじゅ』が廃炉と決まったにもかかわらず、また高速炉をつくと政府は言っている、何故？の疑問は悶々として理解できないまま今日まで来ましたが、『もんじゅ』に仕事人生をかけてきた早野さんの説明は晴天の霹靂と言えるほど明快にその必要性を披露して頂けました。

何故プルサーマル計画が理解できたかですが、地球最後の燃料と理解していたウランの残存量は100年と意外と短いものですが、軽水炉におけるウランの使用燃料は0.7%で残り99.3%はプルトニウムとして使用済み燃料扱いされていますが、このプルトニウムを利用できる技術が高速炉であり、ウランを無駄なく使う流れがプルサーマル計画だと分かり、今後の原子力発電の理解に大いに役に立つ基礎知識となりました。

多分同じグループの他の市民の方々はプルサーマル計画を認識できた方はいないのではないかと推察しています。同じグループの方々にその理解状況を聞いてみようと考えていますのでその理解度は確認できます。興味深いところです。

また今回参加された方たちは原子力発電に関心の高い方たちであったために盛り上がりましたが、市民との対話会は今回私も参加募集に加わり金氏さんと合わせて30名と成功裏に終わりましたが、残念ながら今のやり方で個人が個別に動員するのには限界を感じました。実りあるも継続には限界があると判断します。画期的なアイデアとそれを実行するための人材と資金の必要を感じています。

キーワードは自然と広がる仕組みづくりです。台湾の黄氏が言っていた大事ななのは1人が10人、10人が100人に広げる仕組みであると改めて痛感しました。

<野村真一(Cグループ)>

社会人で構成されるグループでの対話会参加は初めての経験であり、加えて、グループでの対話テーマを設定しない形態での対話であったので、その進行は手探りの状態であった。ここでは、最初に自己紹介、これに続いて“日頃疑問に思っていること”、及び、“もう少し深く知りたい事”を述べてもらい、これと併せて、事前アンケートで回答を得た“興味ある項目”をグループ構成員に紹介し、これを参考にしてテーマを設定し対話を開始した。

ここでは、現実には合わないゼロリスク追及の危うさへの警鐘が活発に議論され、これに続き、再生可能エネルギーの普及拡大提言と併せ、気象条件に左右されるその特性を克服するための原子力発電や LNG 火力との共存という議論展開は、社会人ならではの広い視点と日頃からの関心の高さから出てきたものを感じた。これに加え、メディア報道を無批判に受け入れる事の危険性が議論され、この結果、報道・評論内容に対する判断力を高めることが必要と参加者に認識されたことは対話会の収穫であった。

今回の対話を通して、社会人で構成されるグループの対話では、これまでの社会での生活を通じて客観的な理解・判断力を蓄積している人がいることを感じると同時に、この様な機会を通じて客観的な情報の提供、及び、メディアからの玉石混合の情報を取捨選択するため、報道・評論等で得られた情報に対し、疑問をもって接して客観的に判断する人が増えていくように感じた。

最後に、今回の対話会を通じ、日頃エネルギー問題や原子力に接する機会の少ない社会人の関心事について感じた事を述べる。すなわち、前述事項に対する理解を得るためには、高い安全性の確保のもと、発生する事象が家庭生活への影響まで落とし込んだ説明、例えば、発電コストの上昇が家庭電気料金の増加に結び付くことは思いつぐが、これ以外にも製造業でのコスト上昇に起因する製品価格への転嫁、運輸コストの上昇による配達価格への転嫁、及び、食料品の冷凍・冷蔵コストへの転嫁に起因した家庭食糧費の増加にも及ぶことを説明に加えることで問題点を理解する人が増加することが期待される。

<早野睦彦(Dグループ)>

社会で活躍されてきた方々との対話会は学生との対話会と異なることを期待して参加しました。学生の場合は会社に入る前の好奇心からいろいろ教えてもらいたいとの姿勢に対し、今回は予想通りすでに自分の考えをお持ちの方との対話になり私自身には良い刺激になりました。

D グループの事前アンケートによる興味事項は「日本のエネルギー事情と政策」が多いものの「原子力発電の安全性とリスク」「エネルギーの発電単価、電気料金」などの事項も多く万遍なく広

がりがありました。私はファシリテータを務めましたが、通常、学生の場合発言を促すのに苦勞をしますが、今回は質問に答える形で参加できファシリテータとしてのいつもの苦勞は全くありませんでした。テーマの中で私の専門が高速炉であるとの自己紹介があったためかもしれませんが、もんじゅや高速炉についての質問が多く個人的にうれしく感じましたし、グループ報告ではきちんと高速炉の役割を理解されて報告いただきありがたく思いました。

九州に来ていつも感じることですが、関東と違って保守色が強くメディア批判として一家言お持ちの方も多くて九州王国という感じがします。元代議士で現在大学学長を勤められている方は原子力についての理解も深く SNW として是非とも政界に復帰いただきたいものと思った次第です。

ただ逆にこのような対話会では原子力に関してもっと批判的な意見が聴ければ参加した甲斐があるとも思いました。3 年ほど前にスタジオ日本という日曜討論番組で一緒に井上政典様と再会し旧交を温めることができうれしく存じました。ありがとうございました。

<若杉和彦(A グループ)>

今までの学生との対話ではなく、原子力の専門ではない一般市民から意見を聞き、親しく交流できたのは、世話役の金氏様、中崎様の企画とご苦勞の成果であり、まず感謝申し上げたい。参加された市民の方々は、“一般”ではあってもそれぞれ豊富な体験と成果を残された方々で、社会生活や世論に対する深い洞察から多くの意見を発言され、シニアも大変得ることの多い対話会であった。

印象に残った話をひとつ採りあげたい。福島原発事故で多くが亡くなり、人生も土地も奪われ、未曾有の大災害があった。私は原子力だけは絶対に無くすべきだと思うと主張する参加者がいた。また、タクシー会社を経営している参加者からは、1970 年代の交通戦争の時代に毎年 2 万人もの交通事故死があり、自動車を無くすべきだとの議論が一斉に起こった。しかし、タクシーもなくなった場合の不便さを考え、種々の議論の末結局自動車は残り現在に至っている。もちろん安全性への努力は続けなければならない。これも人間の知恵ではないか、の主旨の話があった。

学生との対話会では聞けない実体験に裏打ちされた対話ができるのも市民との対話会である。原子力に対しては四面楚歌の現状の中で、シニアも逆に勇気をもらえたような感覚を覚えた。

11. SNW 九州の対話集会に参加して

井上 政典(C グループのファシリテーター)

原子力の話になると、原子力を作った人や運用をしている人が中心となってお話をされますが、今回のようにいろんなキャリアを持った人々が集うとまた違った展開になりました。

それは原子力で電気を作る側の人間とそれを使う側の人間の両方が本音で意見をぶつけ合う場所になったからです。電気が常に需要と供給のバランスが要求されるように、供給側と需要側の意見を同時に聞くことはとても意義あるものでした。

私がファシリテーターを務めたテーブルでは、料理学の先生が居られたり、金属学の先生が居られたり、銀行マンやホテルの経営者が居られたりと多種多様でした。それぞれがマスコミや反対派が流す情報に信憑性がないと気付いて正しい知識を得ようと参加された方々でした。

本気で正しい情報を得ようとし始めたら、すぐに原子力の必要性が理解できるし、安全性も理解

しようとされるのですが、頭から「あぶない」「怖い」という人は始末に負えません。

このような地道な対話集会を通じて正しい原子力の知識の情宣活動をしていくしかないでしょう。めんどくさい、地味な活動ですが、誰かがしなければなりません。SNW 九州の皆様、今後ともよろしくお願いします。私もできるだけ力になるようにいたします。

12. お話し会の様子(集合写真は抵抗あると判断し、今年も撮らなかった)

